

No.1 - 2018.04.15

ニュースレター

発行:自由律俳句協会設立準備会

(このニュースレターでは自由律俳句協会設立に向けて最新の動きをお伝えしていきます。)

少なくとも 大きな一歩を踏み出しました！

自由律俳句協会設立準備会 世話人(五十音順)

佐瀬広隆 白松いちろう 新山賢治 そねだゆ
寺田和可 平岡久美子 吉本知裕

「自由律俳句協会」設立に向けて、私たちは昨年暮れから議論を重ねてきました。今年2月には全国各地の短詩系文学愛好者161名の方々にアンケートを実施し、3月24日の設立準備総会への参加を呼びかけました。その結果、72名(4月1日現在)から返信をいただきました(回収率45%)。3月24日の準備総会は、参加者は私たち当初からの発起人のうち6人、それに4人加わり10人でした。厳しい船出となりましたが、松山、札幌から参加くださった方もあり、2時間、熱い議論を行いました。以下、その報告です。



◆改めて「自由律句のひろば」のスタートから解散までの状況認識を共有しました。

昨年の11月21日に「自由律句のひろば」は解散となりました。そのいきさつについて、那須田康之氏(前代表)、藤田踏青氏(前役員)に先日直接会い、改めて話を聞きました。

初代代表の富永鳩山氏を継いだ那須田氏は「ひろば」の運営を藤田氏との二人だけで担うという事態に追い込まれました。問題の核心は、会運営の実務者の不足にありました。助けてくれる人が誰もいなかったのです。

これに対して、「この火を、後継者がいないという理由で潰していった方がいいのだろうか。」“自由律句のひろば”発起人の一人、高村昌慶氏の会場での発言は切実でした。「“俳句は共感の文学”と言われながら、“共感”して運営していくというコミュニケーション力が不足していた」など厳しい意見もでました。「自由律句のひろば」の総括は、今後も深めていながら、これからの教訓としていくことで、参加者一致しました。

わたしたちが再生する会の名前を「自由律俳句協会」とします。「自由律俳句」か「自由律句」か、句論を戦わせるのは大切なことですが、そのことが組織的なセクショナリズムへと転嫁されるのは不本意です。「自由律俳句協会」とすることで、これまで躊躇していた人々への参加を呼びかけました。また、「自由律句」を推進する方々にもその趣旨を説明しました。(新山)

◆アンケートに寄せられた意見を分析しました。

※アンケートに寄せられた意見は別紙にまとめましたのでごらんください。

- アンケートを読んで、まず強く感じたことは、束縛のない自由な発表の場、交流の場を多くの人が求めているということです。「果たして自由律とはどんなものをいうのだろうか」と個人的に悩んでいる方もいました。これに応えるために、協会として、何か手引きになるようなものは作れないか、と感じました。(佐瀬)
- 「総会は是非やって欲しい」「参加者が投句してそれを評価する協会賞をやって総会で表彰してくれれば、意欲が出る」という待望の声はしっかりと受け止めたい。(そねだ)
- 「自由律俳句とはどんなものかをまとめ上げる力を持ってほしい」「外部からの希望や問い合わせに対応できる窓口が欲しい」「フォーラムやシンポジウムなどを通して外部に開いた活動をしてほしい」などの声から、結社ではできない協会の役割の姿が見えてきた。(佐瀬)
- 「“自由律句のひろば”が解散したことを考えれば会の発足自体無理だと思う。発足を断念されてはいかがでしょうか」という厳しい声があることを忘れず、「自由律句のひろば」の総括をしっかりと行い今後役に立て、長続きする組織作りをしていきたい。(佐瀬)
- 各地区でブロック大会が立ち上がり充実していけば組織はより強化されると思う。(白松)
- 「ホームページを立ち上げてほしい」「結社誌・句集の電子化、管理」「相互に閲覧できるシステムの構築」という「声」を受けて、早速ホームページを開設することとし、さらに「年鑑」を作って、電子化し、他の組織と連携していくべきと思う。(そねだ)

◆「自由律俳句協会は何をすればいいのか」あるべき姿の提案を確認しました。

- ① 「自由律俳句協会」は、常に情報を会員の皆さんにフィードバックしながら、一つ一つ具体的な行動をしていく世話人になりたい。
- ② 情報を共有するための「ニュースレター」をこまめに発行する。
- ③ 総会を開く。まず、今年9月8日に、「自由律俳句協会」設立総会を開く。
- ④ 速やかにホームページを立ち上げる。これを皮切りに「結社誌・句集の電子化の管理」「相互に閲覧できるシステムの構築」を付加していく。
- ⑤ 「自由律俳句協会年鑑」の発行を試行錯誤する。

◆今、現在、発起人は19人です。(五十音順)

荻島架人、黒瀬文子、佐瀬広隆、白松いちろう、新山賢治、そねだゆ、高村昌慶、田中陽、棚橋麗未、ちばつゆこ、寺田和可、富永鳩山、中村加津彦、野谷真治、野田麻由可、島働猫、久光良一、平岡久美子、吉本知裕

※発起人になってくださる方を求めています。

◆ニュースレター、メールでの配信を希望される方は以下のアドレスまで御連絡ください。経費節減のため、メール配信を選ばれることをお願いします。

Jiyurituhaiku@gmail.com

アンケートに寄せられた声から

※設立準備総会当日は原文のまとめを配布しましたが、ここでは紙面の都合上、寄せられた声の一部をご紹介します。

① 句作を続ける中で、あなたが抱えている問題は？

◆多くの人が切磋琢磨する場を求めています。

- *ただ作って楽しいだけでよいのか？ 人の心に響く句であろうか？ 一人よがりの自己満足ではないか？ いつもそんな迷いを抱えています。切磋琢磨する場の必要性を感じます。
- *周囲には共に作句を楽しむ人がいなくて、独り善がりの句を作っていますので、いくら自由律とはいえ、このような句を作っていてよいのかと悩んでいます。
- *投句のみの結社所属活動です。やはり句座に拘って、他者との触発に新しい学びや情報交換等に活路を見出して自身を高めていきたい。
- *思いつきで句作をしているが、推敲の場になかなか出られない。
- *句会に参加したいが遠くて行けない。
- *句会の句評で、何故、共感できなかつたかを知る機会が少ない点が気がかりです。

◆仲間づくりの難しさもうかがえます。

- *周りに自由律で作る人が少ない。
- *月1回の自由律句講座以外には、句に興味ある人が周りにいない。
- *句友の数が年毎に少なくなったことです。
- *何とか若い会員を増やしたいと思っているが、なかなか難しい。
- *日常での自由律の仲間作りは難しい。どうされているのですか？ 知りたいです。

◆広く発表する場が求められています。

- *自由律を俳句として認めたがらない人が多い。俳句賞をはじめコンテストにおいて門前払いにされる。
- *「市民文芸」などに応募しても審査員に理解する人がいない。
- *新聞では一時期、自由律俳句や短歌が入選していたが、同じ新聞欄でも今は定型に戻ってしまった。自由律排除の傾向があり、ちょっと淋しい。
- *自由律俳句作品の発表の場を増やしたい。
- *発表の場がテレビ・ラジオ・新聞などであればいいと思います。
- *投句の自由に掲載できる「場」を提供してほしい。

◆「自由律」に取り組む創作者としての思い、表現の悩みも語られていました。

- *自由すぎてとりとめのないこと。空の雲に良し悪しがないように。
- *自由律だから自由というけど、きちんと俳句として自分で律していなければならない。
- *新たな形式が必要なのか、感性が必要なのか迷いの中。切れに対する構造的な内容の説明があればとも思う。
- *俳句形式に「今」をどう持ち込むか。
- *戦前の重苦しい様相に逆戻りの空気が感じられるが、俳句という表現がどれほどの抵抗を志していくか、そのへんを問題視しています。
- *「昔から名句といわれる俳句に難しいものはない、一般大衆が読んでも理解できるものばかりである。」この言葉を頭に置いて句作していますが、前途ほど遠いです。

◆現在の自由律俳句をめぐる状況も考えさせられます。

- *地方の少子高齢化は深刻で、老老介護など家庭的な困難を抱え、文学までの道のりが難しくなった。若い人の短詩型文学離れ。自由律俳句の方法論がわからない。
- *現代作家の作品をもっと読みたいが、流通している自由律の句集が少なすぎる。
- *古典的自由律俳句の句質の高さやリズムのよさが感じられない今日の自由律俳句に違和感を覚える。自由律俳句が発生した動機や歴史的経過を知る機会を探りたいものです。
- *子どもたちが興味を持つ場を増やすには、どうしたらよいのか。
- *新しい自由律俳句への芽は若い人たちの間に育ちつつあると思いますが、古き良き自由律の作り手が減りつつあります。この両方の共存を考えていかないと将来へ向けての展望が開けないと昨今思っています。

◆“組織”というものに警戒する人もいます。

- *俳句は好きです。学ぶこと、教えるを乞うことも好きです。けれど組織となると、いろんな決まりや思惑にからめられることが生じ、理不尽に感じたりもします。
- *もともと組織というものにそれほどのこだわりはありません。むしろそこから身を引いた所で句作を続けていきたいと思っています。
- *それぞれの結社・グループ・人によって、短詩系文学に対する考えが異なるのはしかたない事と思うが、感情的な対立・争いには巻き込まれたくない。

——そして、最も多くの方があげていた悩みが「年齢」と「健康」でした。

② 自由律俳句協会への期待（こういうことをしてほしい）

◆結社の枠を超えた活動への提案が多く寄せられました。

- *企業で言えば業界団体がそうであるように、結社个体では出来ない活動に絞る方が継続性があると思う。例えば広報活動、フォーラム等のイベント、外部からの問い合わせの対応。ホームページの運営など。

- *結社誌・句集の電子化、管理。相互に閲覧できるシステムの構築。
- *ネット交流の場を作ってほしい。俳句の勉強の場を作ってほしい。
- *新しい作家が出てきた時に、そのバックアップをしてほしい。
- *協会は俳句する人達へ適切な「場」を提供できるサービス組織と位置づけたい。手引き書、吟行、句会の方法、自由律俳句の先人の仕事等の資料提供、自由律俳句の資料を後世に引き継ぐなど、身の丈で出来るところから。
- *現代作家の作品を広く世に出す。自由律との新たな出会いの機会を提供する。伝えるべきものを残し、次世代につないでいく。各地域・グループの活動の広報支援。
- *自由律俳句の存在をアピールし、その楽しさや生きる力になること、そして身近な文学であることを伝えて欲しい。協会ができれば報道機関などへの対応もできるようになるのでは。
- *山頭火や放哉を通して自由律俳句を知ってほしい。教科書に載っていたことがあったが続けてほしい。子供、学生、先生に知ってほしい。
- *「現代名句作品集」を示して、どのような句が望ましいか、明示してほしい。
- *自由律先細りの現在、一般人（大衆）が気軽に読める自由律俳句誌ができたらと、日頃から考えています（肩の力を抜いて読める俳誌）。その方向を目指して欲しい。
- *尾崎放哉賞のようなコンテストも良いが、たとえば、最低30句以上でのコンテストが協会でも催されると励みになる。
- *若い世代へのアピール、人材募集、幅広く。句論・討論大いにされるべき。「川柳」「短歌」などとの交流。目に見える活動を！協会が何らかのイベントで投句を募集される場合は、参加者全員による互選にて決めること。
- *将来的に多くの賛同が得られる組織になったら、全国規模での俳句大会、井泉水賞・一碧楼賞等自由律俳句賞の開催、俳句フォーラム等の開催など考えることができる。

◆つながり、交流の場が期待されています。——「ひろば」の継承を求める声もありました。

- *年に1回くらいは仲間が集える場所を計画して欲しいです。
- *全国六大都市で一年に1回ずつ自由律地方大会を開催しては。
- *年1回の俳句大会開催（自由律俳句協会賞）年2回程度の作品集発行。
- *毎年、大会を開催して交流を持つことが必要と思います。
- *作品発表と交流の場です。
- *1.「100人句集」を続けて欲しい。2.年1回の大会を続けて欲しい。費用の関係上出席できないこともままありますが、投句参加したいと思います。選句は全員参加の互選にして。

◆新たな組織づくりへの意見も寄せられました。

- *今後の発展を考えると「個人・団体（グループ）参加型」の組織がよいと思われる。
- *構成員（会員）は各結社（主宰・代表）と、結社に所属していない個人とし、それぞれの活動を支援するための広報活動をする。「自由律句のひろば」の「機関誌」と「百人句集」を継承する。運営については、このような会の運営について経験・知識のある人を加えておいてください。
- *各地区でブロック会が立ち上がり充実していけば、組織はより強化されると思います。会員が何を望んでいるかを絶えず聴取し、便宜の図れる団体、メリット感のある団体に育ててほしい。

- * 個人に運営を押しつけるのではなく、システムとして、句作を続ける人々をアシストする実務方法を一つ一つ考えながら、確実な仕組みに到達させたい。
 - * 「自由律俳句協会」の創立は賛成であるがあまり期待はしない。これからの方向としては、結社・個人百花繚乱でいいと思う。井泉水の「層雲」世界にはあまり囚われる必要はない。
 - * 「自由律」に固まってしまうと、他の「有季定型」を旗印にしている協会とおなじ次元となってしまうかわないか、心配です。
 - * 会員にも運営して下さる方にも負担が少なく、いつまでも続く自由律俳句協会であって欲しい。
 - * 継続することが一番大切です。シンプルな会になるといいですね。
 - * 「ひろば」が設立してすぐ解散となった原因は何だったのか？ 一般会員にはわからないことばかりですが、今回は少しずつでも地道な歩みで、結束を固くしてほしい。
 - * 今まで人と人との軋轢や、結社間のいざこざに終始しているような感じだったので、正直「ひろば」が終わったとき「ホッ」としたのも確かです。しかし、自由律が廃れている今、横のつながりは大切だと思っている。
- 「自由律句のひろば」の反省から、長続きする組織づくりを求める声が多かった一方、
 厳しい声もありました。
- * 自由律句のひろばが解散したことを考えれば本会の発足自体無理だと思う。発足を断念されてはいかがでしょうか。

③ その他

◆励ましの言葉、協力や連携の申し出とともに、こんな声もありました。

- * 「自由律句のひろば」の終焉との関係をどのように総括し「自由律俳句協会」を設立するのか。
- * それほどのエネルギーは「ひろば」解散の前に注いでほしかった。
- * 自由律俳句協会設立準備局のおっしゃっていることはよくわかり、今この時期の大切なことはよくわかります。定型も同じことをお考えだと思います。
- * 自由な創作、自由な鑑賞を保証する組織であってほしい。
- * 定型句しか認めないとか、反対に自由律しか認めないとかは止めて、どちらであろうと良い句は評価しあい、俳句を広い視野で語り合えるところが増えることを目指したい。
- * 若い人への働きかけが必要。
- * 亡き母は晩年、自由律句と出会い句作を続けることで、夫に先立たれた寂寥感から解放された。その恩返しとして、自分にできることは何なのか青臭く考え、貢献したい。
- * じっくり時間をかけて前向きに前進していければ必ず多くの人の賛同が得られるでしょう。独断、拙走は断じて行ってはなりません。
- * 自由律の句集をメディアに広く発信して、目に留まればいいのにと夢見ている。
- * 同好のお仲間とは、一緒に“わくわく”したい。

——アンケートにご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。